

# 中学校の家庭科に関する実践能力と必要意識

—客観的項目とあそびの観点の内面的項目をもとにして—

Practical ability and Need to in Home economics of a junior high school

夫馬佳代子・三浦莉笑・杉原利治

FUMA Kayoko, MIURA Rie and SUGIHARA Toshiharu

キーワード：家庭科・自己解放・実践能力・必要意識

## 1. はじめに

学校教育における家庭科の果たす役割についての論議は、昭和26年の家庭科の存置理由の答申以来、今日まで幾度となく繰り返されている。これは、ある意味で実生活と直結し、社会の動向や経済的背景の影響を反映し易い家庭科ならではの特徴と捉えることもできる。拡大的に捉えれば、家庭科はその時代の人間の生き方を追求することが課題であると考えられることもできる。現在の家庭科教育では、家庭科に市民教育としての役割を見出す視点も見られ、社会の中での生き方の追求がされる傾向にある<sup>1)~5)</sup>。

中学校の教育の場では、「生きる力」や「生活創造」などの追求が教育目標に掲げられる傾向もみられ、学んだ知識を家庭生活にフィードバックし、主体的に生活に関わり、実践的な能力の育成を目指す、さらに自分らしい生活について考える傾向にある。

本研究では、こうした家庭科で育てようとする力が、子どもの視点から見るとどのように捉えられ、どの程度定着しているのか、その実態を探ることを目的としている。ただし、家庭科の内容を分析の対象としているのではなく、継続研究である「創造と自己解放の家庭科教育」で提唱した「あそび」の概念をもとに家庭科を捉えた。(本報は「創造と自己解放の家庭科教育7」と位置付ける)つまり、より人間らしく生きることを探求する「生活創造」や、自分らしく自己表現できる場を作り出す「自己解放」こそが家庭科の特性であるという考えのもとに、現在の指導要領を10の観点で捉えなおし、その観点をもとに中学生にアンケート調査を実施した。

本報では、この調査結果における実践能力と必要意識の実態及び関連について若干の知見を得たので報告する。

## 2. 研究方法と分析方法

### (1) 調査対象

調査対象は中学生306名(1年生男子75名・女子79名/2年生男子78名・女子74名)とした。アンケートの調査時期は、平成16年12月に授業内に配布し、留置法で調査を行った。

### (2) 研究方法

#### ① アンケート調査票の枠組み

表1は、アンケート調査の枠組みを示したものである。まず、家庭科の学習内容を「客観的項目」と「内面的項目」の2つに分類して捉えることとした。これは、家庭科の特性として知識・技能の習

表1 アンケート調査の枠組み

	<軸>	視点	【分類項目】	食・住・衣生活それぞれの内容
客観的	知識	科学的	①科学的知識	●食：栄養 ●住：採光 ●衣：布の性質
		合理的	②合理的知識	●食：廃棄の少量化・短時間の調理 ●住：安全な住まい ●衣：効率のよい洗濯法
		情報獲得	③情報獲得能力	●食：健康によい食材 ●住：インテリア ●衣：流行のファッション
	技能 (生産・産業)	技能を用いた 実践力	④技能レベル<1>	●食：簡単な料理 ●住：身の回りの管理 ●衣：縫製の基礎 (ボタン付けなど)
			⑤技能レベル<2>	●食：凝った料理 ●住：身の回りの掃除 ●衣：衣服の製作
内面的	交流	家族・地域 との交流	⑥家族・友人・地域 との交流 (社会性)	●食：友人や家族と会食 ●住：家族との団らん ●衣：TPOを考慮した衣服選び
	探索	探索行動 発明・考案	⑦いろいろと自分のアイデア で試行錯誤・応用能力	●食：自分のアイデア料理 ●住：住居内の問題点の解決法を考え解決する ●衣：自分らしい衣服のコーディネート
	創造 (イメージ 形成)	創意工夫 イメージ形成	⑧自分らしい考えを生かし イメージを膨らませて、 生活を創る能力 (創造性)	●食：食事メニューの工夫 ●住：自分らしい部屋作り ●衣：イメージをもとに作品をつくる
	ゆとり いやし 感覚 (人間らしい 五感)	ゆとり いやし	⑨ゆったりと生活を見直す 心と体のいやし	●食：くつろいで食事できる雰囲気 ●住：安らぐことのできる空間 ●衣：くつろぐことのできる衣服
		人間らしい 五感	⑩うれしい・悲しい おいしい・まずい 等 人間本来持つ感覚『快』の追求	●食：味覚にこだわりおいしさを求める ●住：居心地のよい住居を心がける ●衣：衣服の着心地の良さを求める

得だけではなく、創造性や社会性など多面的な学習内容が含まれるため、その特性を分類し、そこから派生する項目を〔調査項目の軸〕、〔調査内容の視点〕と表した。

この「客観的項目」とは、家庭科の学習内容の中で、学習効果が第三者にも客観的に把握することができる、つまり外面に表出する内容を示している。例えば、技能の習得や知識の獲得などであり、テストの形式で定着度が確認できる項目である。具体的には、「客観的項目」を示す軸を〔知識〕、〔技能〕に分類し、〔知識〕に関しては【科学的知識】【合理的知識】【情報獲得能力】、〔技能〕に関しては、基礎的な技能を示す【技能レベル1】、高度な技能を示す【技能レベル2】に分類した。一方「内面的項目」は、家庭科の学習の特質とも捉えられる項目で、明確な学習効果を客観的に捉えることができず、各個人の内面に内在し、長期的に学習効果が表れると予測できる項目を示している。具体的には、継続研究で提唱した家庭科に取り入れたい「あそびの教育的要素」である「創造性」「発見探索行動」「自立」「自己解放」「精神」「活動」「イメージの広がり」「心情」「社会性」「発達」などの中から、家庭科で育てる人間形成の内面的要素として〔交流〕(家族・地域との交流)、〔探索〕(試行錯誤)、〔創造〕(イメージの形成)、〔ゆとり・いやしの感覚〕(人間らしい五感)の5項目を軸とし、さらに、各軸に対応する具体的な能力を《求める能力》として示した。

表1に示す<食・住・衣生活それぞれの内容>については、現在用いられる教科書の既習内容から該当する項目を選出し、具体的な質問内容のもとにした項目である。

## ② 調査票

資料1は、中学生に配布した調査票である。各調査票の質問項目は、表1に示した内容を中学校の既習内容に応じて具体的に示したものである。各質問項目ごとに「実践能力」と「必要レベル」に分けて4段階で最も自分に近いレベルを選択する形式とした。「実践能力」は、各自が「現在生活の中で実践している」、あるいは「できると思う」レベルを選択するもので、子どもの実態を把握することを目的としている。「必要レベル」は、「今後生活していく上で、どの程度必要と思うか」と、子どもの将来に対する意識のレベルを問うものである。調査票で選択する番号は、各項目1つに限定した。

### ③ 分析方法

アンケート調査票の「実践能力」と「必要意識」の回答項目のレベルを「よくする」「とても必要だと思う」を4点とし、段階に応じて減点し、「全くしない」「全く必要ない」を1点とした。この集計結果をもとに、各質問項目の平均点を算出し「全体」「男女別」「学年別」の平均点を「客観的項目」「内面的項目」の各項目ごとに「実践能力」「必要意識」間で比較し、性別や生活経験の影響について検討をした。さらに、各項目の「実践能力」と「必要意識」の回答をクロス集計し、独立性の検定を用いて両者の関連について検証を試みた。

## 3. 結果及び方法

### (1) 家庭科において「育てたい力」と「あそび」の教育的要素

本研究では家庭科の新たな学びの提案として、「あそび」の教育的要素を生かして、家庭科を単なる生活知識や技術の獲得のみでなく、より人間らしく生きるための生活創造能力、さらに人間形成にまで多大な影響を与える学びが可能ではないかと、家庭科の学びの可能性について模索を続けてきた。しかし、現在実施されている指導内容においても、指導目標として明示されていないが、「あそび」の教育的要素を生かした学習内容は見られる。<sup>9)</sup>

表2は、中学校の『技術・家庭<家庭分野>』の教科書中にみられる題材のねらいを、「あそび」の教育的視点から「今後の家庭科で育成したい力」として捉え直したものである。ここで取り上げた題材は、題材のねらいとして本報で表現する「客観的項目」に該当する「題材のねらい」も記されているが、表2からも明らかなように、「内面的項目」として捉えることができる。つまり、学習の課題、目標として客観的項目が記されていても、同一の課題において、将来の生活創造、人間形成に関わると思われる内面を育成する「内面的項目」も含まれていると捉えることもできる。

なお、本報では、このようにして捉えた「今後の家庭科で育成したい力」を「内面的項目」の調査項目に反映した。「客観的項目」も同様に教科書の題材から選出した。

### (2) 中学生の「実践能力」と「必要意識」の実態

表3は、分析方法で述べたようにアンケートの調査項目の選択レベルを点数化し、各項目の平均を一覧に示したものである。この表から2つの傾向が見られる。

まず、第1は「客観的項目」「内面的項目」とともに「実践能力」に対する評価よりも「必要意識」に対する評価のほうが高い点である。これは、各調査項目に対する実践あるいは実態に関する自己評価は低いが、将来の生活の中では、このような内容は必要となると認識していることを示している。

【技能レベル1】の基礎的技術や【人間らしい五感】の人間が本来持つ感覚に関する項目では、両者の間にあまり差が見られない。

第2は、「客観的項目」と「内面的項目」に関し、平均点で比較すると「実践能力」が2.7、「必要意識」が3.3と3.2と、両者ともに平均点では差異が見られない点である。

そこで、各項目別の特徴について以下で捉える。

表2 「あそび」の観点で捉えた中学校教科書の内容

あそびの要素	教科書の題材名	題材のねらい	今後の家庭科の中で育成したい力
創造性	食事の計画を立てよう (教科書p.52, 内容A(1)-ウ)	健康的な生活をするために、今までの学習を生かして、順序よく献立を立てましょう。	学習したことを生かして自分の食事の献立を立てるなど、自分で生活を作りだしていく能力
	住まいを清潔にしよう (教科書p.90, 内容A(4)-イ)	住まいを清潔にするために、それぞれの空間に対して、どのような工夫ができるのか話し合ってみましょう。	住まいを清潔に住みややすくするための工夫を考えるなど、よりよく生活するために工夫する能力
	住まい方を工夫しよう (教科書p.84, 内容A(4)-イ)	みんなで使う空間をもっと快適にするために、わたしたちにてできることは何でしょうか。	家庭で使う空間を快適にするために自分にできることを考えるなど、自分でできることを考え出す能力
	衣服を大切にしよう (教科書p.132)	不要になった衣服をそのまま廃棄するのでなく、別の形で活用することができないでしょうか。	不要になった衣服を別の形で活用する方法を考え出すなど、自分なりに工夫していく能力
	絵本やおもちゃをつくらう (教科書p.202, 内容B(5)-イ)	幼児の喜ぶ様子や発達の特徴を考えながら、身近にある材料を利用して絵本やおもちゃをつくり、幼児と一緒に遊んでみましょう。	幼児の喜ぶ様子を思い浮かべながら幼児の絵本やおもちゃを作るなど、想像力を働かせる能力
発見探索 行動	食品を組み合わせてみよう (教科書p.32, 内容A(1)-ウ)	今日食べた食事の材料を調べて食品群に分けてみましょう	今日食べた食事を食品群に分けるなど、調べて自分の生活を資料と比較検討する能力
	住まいの安全性について考えよう (教科書p.88, 内容A(4)-イ)	幼児や高齢者の立場に立って、住まいの中の危険なところをチェックしてみましょう	幼児や高齢者の立場に立って住まいの危険なところを考えるなど、他人の立場になって思索する能力
	わたしたちの食生活の課題 (教科書p.98, 内容A(5)-ア)	外食やコンビニエンスなどの利用によって、私たちの食生活は、一見便利そうにみえますが、何か問題はないのでしょうか。	外食やコンビニエンスの利用など、自分の生活の中から問題点を探し出す能力
	会食のための献立を考えよう (教科書p.106, 内容A(5)-イ)	食器や盛り付け方を工夫したり、季節感のある飲み物をつけるなどして、見た目にも楽しい献立を考えましょう。	会食での盛り付けを工夫するなど、楽しく生活するための工夫を 試行錯誤して考える能力
	採寸しよう (教科書p.116)	衣服のどこにゆとりが必要なのか、いろいろな動作をして、体の寸法の変化を確かめてみましょう。	衣服の製作を採寸する際に、いろいろな動作をしてどこにゆとりが必要か考えるなど、実践的に考える能力
	選ぶときの条件は (教科書p.178, 内容B(4)-ア)	多くの商品の中から、本当に必要なものを入力するためにはどのようにしたらよいでしょう。	本当に必要なものを買うためにどうしたらよいか検討をするなど、主体的に選択できる能力
	トラブルの解決 (教科書p.182, 内容B(4)-ア)	商品を購入して困ったことが起こったとき困ったことはいないでしょうか。そんな時どうしたらよいでしょうか。	商品を購入して困ったことが起こった時どうするかを考えるなど、生活の中でトラブルが起こったときの解決法を考える能力
	住まいのはたらきと役割 (教科書p.80, 内容A(4)-ア)	「早く家に帰りたい」と思ったことはありませんか。それはどんなときでしょうか。	自分の家(家庭)に対し、「いやし」や「ゆとり」を感じ、家庭に愛情や安らぎを求める心の安定
	心の発達 (教科書p.150, 内容B(2)-イ)	うれしい、悲しいなどの感情はどのように身についたのでしょうか。	「うれしい」「悲しい」などの人間的な感情を素直に感じる心の育成
	子どもと家族のかかわり (教科書p.154, 内容B(2)-イ)	私たちが小さかった頃家族にしてみたらうれしかった事、悲しかった事などの経験を話し合ってみましょう。	家族とのふれあいの中で、「うれしい」「悲しい」などの人間本来の感情の大切さに気づき、家族に感謝できる心の育成
自己表現	自分らしく着よう (教科書p.62~64, 内容A(3)-ア)	自分らしく着よう	自分らしく衣服を着るなど、何かで自己表現をする能力
	住まい方を工夫しよう (教科書p.85)	わたしのねがい、自分の空間	自分の望む部屋を創造するなど、自分の願いを何らかの形で表現する能力
発達	材料と用具を準備しよう (教科書p.121)	ロックミシンの使い方を知らう	ロックミシンが使えるなど、用具を適切に使える能力
	縫ってみよう (教科書p.125)	糸端のしまつ、縫い代のしまつ、すそなどのしまつ	衣服製作の際に縫うなどの必要な技術が見についているなど、生活に必要な技術が身につくこと

表3 調査結果の平均点の一覧

	分類項目	実践レベル				必要意識レベル			
		食	住	衣	平均	食	住	衣	平均
客観的	科学的知識	2.6	2.9	2.6	2.7	3.5	3.4	3.2	3.4
	合理的知識	2.5	2.8	2.5	2.6	2.4	3.4	3.3	3.4
	情報獲得能力	2.3	2.5	2.5	2.4	3.0	3.0	2.8	2.9
	技能レベル<1>	3.3	3.1	2.9	3.1	3.3	3.5	3.4	3.4
	技能レベル<2>	2.4	2.8	2.3	2.5	3.2	3.4	3.0	3.2
	『客観的』の平均	2.6	2.8	2.6	2.7	3.3	3.3	3.1	3.3
内面的	家族・友人との交流	2.9	2.5	3.0	2.8	3.3	3.1	3.3	3.2
	探索行動	2.2	2.3	3.0	2.5	2.8	3.1	3.3	3.1
	創意工夫	2.3	2.9	2.3	2.5	3.1	3.1	2.8	3.1
	ゆとり・いやし	2.9	2.7	3.1	2.9	3.2	3.3	3.3	3.3
	人間らしい五感	3.1	2.9	3.1	3.0	3.3	3.4	3.3	3.4
	『内面的』の平均	2.7	2.7	2.9	2.7	3.1	3.5	3.2	3.3

### (3) 「実践能力」と「必要意識」から捉えた領域別の比較

図1は、食生活、住生活、衣生活に関し、「実践能力」と「必要意識」の回答を点数化し項目別の平均をレーダーチャートで示したものである。【科学的知識】から【技能レベル2】までの右半分が「客観的項目」を示し、【家族・友人との交流】から【人間らしい五感】の左半分が「内面的項目」となる。この図から、領域別に以下のことが明らかとなる。

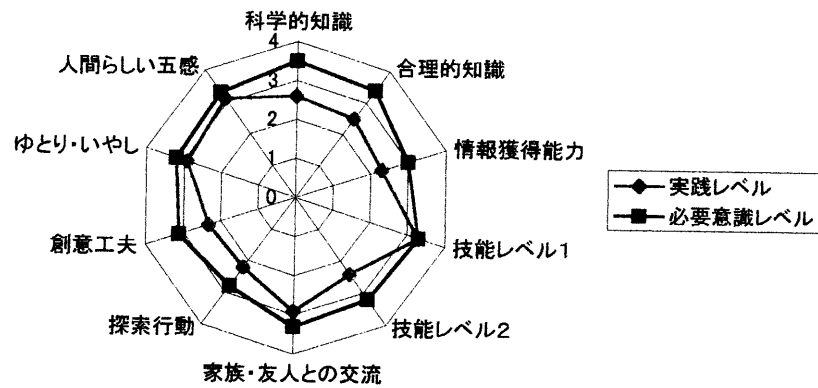
#### ① 食生活

食生活では、他領域に比べ「客観的項目」として揚げた【科学的知識】【合理的知識】【情報獲得能力】【技能レベル】の「実践能力」が「必要意識」に比べ低い。この傾向は男女ともに、さらに1学年と2学年も同様に見られる。今回の調査で【科学的知識】として取り上げた質問は「健康のために、炭水化物・たんぱく質などの栄養素の働きを考えて食事をする」、【合理的知識】としては「食材の廃棄（ごみ）を少なくする工夫や短時間で調理する工夫をする」、【情報獲得能力】としては「健康によい食材の知識や、新しい調理方法・メニューについて進んで情報を入手する」という内容であり、主体的に生活に取り組んでいるか否かを問う質問となっている。食生活は、中学生の段階であると親が準備してくれた食事を受身の状態で食べている現状が予想され、それを反映された結果であると考えられるが、将来的には、こうした知識や行動が必要であると認識している傾向がみられた。

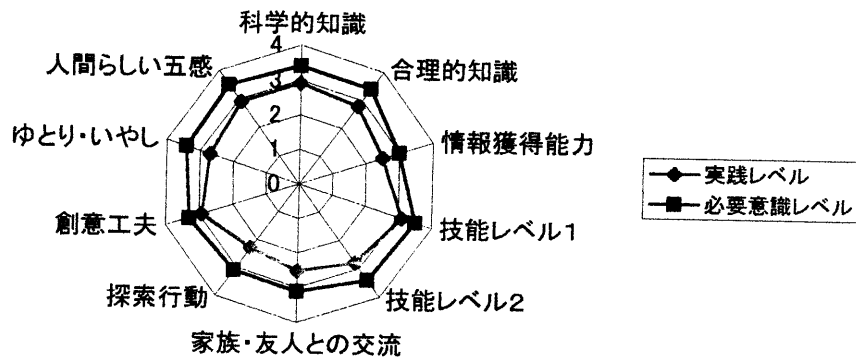
一方で、「内面的項目」は【創意工夫】や【探索行動】の「実践能力」が「必要意識」に比べ低い。具体的な質問内容としては、【創意工夫】は「家族が健康で楽しく食事をするために、食事のメニューや食生活全般について工夫する」、【探索行動】は「地域でとれる食材を利用した調理を考えたり、自分のアイデアでアレンジした料理を作る」などの内容となり、「客観的項目」と同様、食生活は受身であるという実態が明らかとなった。

その他の「内面的項目」の【家族・友人との交流】【ゆとり・いやし】【人間らしい五感】などの項目は「実践能力」と「必要意識」の間に差がなく、家庭における安定した食生活の実態が伺われる。つまり、中学校段階の食生活では、親が主導する食生活であるが、精神的には安定した食事の場面が提供されていると考えられる。

### 食生活



### 住生活



### 衣生活

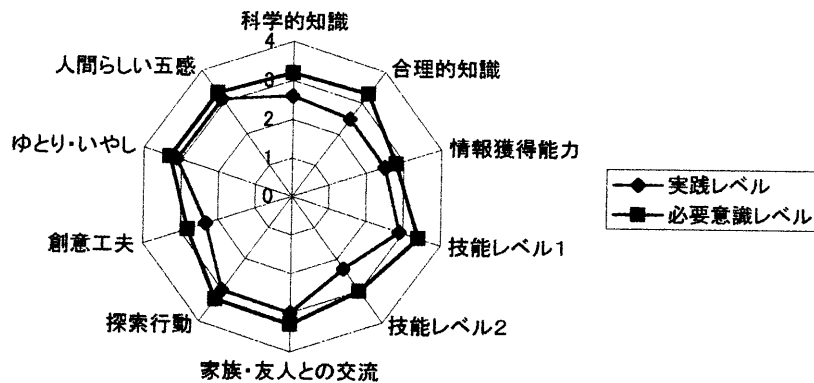


図1 食生活・住生活・衣生活の「実践能力」と「必要意識」

#### ② 住生活

住生活に関しては、全体的に「実践能力」が「必要意識」より低い傾向が見られる。こうした中で【技能レベル1】の質問「自分の身の回りの簡単な整理・整頓などをする」や【創意工夫】の質問「自分の部屋、または住居の一部で、自分のアイデアを生かした快適だと感じる部屋作りをする」は、「実践能力」と「必要意識」にあまり差が見られない。【技能レベル1】は、男女ともに同様の傾向が見られるが、学年を比較すると1年生の方が2年生に比べ高い。また、【創意工夫】も男女共に同様の傾向を示した。このことから、中学生の段階では、自分の部屋の管理には、自分が積極的に関わり、インテリアなどに自分らしさを創意工夫するなど、自分の生活空間を創り出すことに関心が高いことが明らかとなった。

### ③ 衣生活

住生活の傾向とは異なり、衣生活では「実践能力」「必要意識」共に、【創意工夫】の平均点は低い。「実践能力」に関しては、10項目の中で最も低い。一方で、「内面的項目」の【家族・友人との交流】【探索行動】【ゆとり・いやし】【人間らしい五感】は「客観的項目」に比べ「実践能力」と「必要意識」の間に差がなく、平均値も高い。

具体的な質問は【家族・友人との交流】では「社会の中での衣服の働きを考え、衣服選びをする」、【探索行動】は「自分らしく衣服を組み合わせたり、着方を工夫する」【ゆとり・いやし】は「家に帰ると、自分がかつろぐための気持ちよと感じる服に着替える」、【人間らしい五感】は「衣服の下着やTシャツを選ぶとき、自分が気持ちよく着られるデザインや着心地にこだわる」などになり、中学生が自分の衣服の選択には、現段階でも主体的に取り組み、将来的にも必要な能力と捉えていることが分かる。現在の中学校家庭科では、1年生の最初に取り組む衣生活に関する内容が「自分らしく着る」題材となり、自己表現としての衣服のあり方を学ぶ。こうした既習内容の影響や効果が本調査にも表れたと捉えることができる。

#### (4) 「実践能力」と「必要意識」の相関

「実践能力」と「必要意識」の相関について独立性の検定を用いて検証した結果を表4に示す。この表から、各領域の30項目全ての「実践能力」と「必要意識」の間に1パーセントの有意差がみられ、高い相関関係が認められた。これは、各質問項目の内容に積極的に取り組んで生活の中で実践している生徒ほど、将来的にその内容が必要であると考えていることになる。

男女別に「実践能力」と「必要意識」の相関を求めた結果を表5に示す。男女共に全ての項目に1%の有意差で高い相関がみられる。各項目ごとの相関の特徴を「客観的項目」と「内面的項目」に分

表4. 「実践能力」と「必要意識」の相関

	軸	視点	⑩の分類項目	「実践レベル」と「必要意識レベル」の相関関係		
				食	住	衣
客観的 (外面に表出)	知識	科学的	科学的視点 ①	**	**	**
		合理的	合理的視点 ②	**	**	**
		情報獲得	情報獲得能力 ③	**	**	**
	技能 (生産産業)	技能を用いた実践力	技能レベル<1> ④	**	**	**
			技能レベル<2> ⑤	**	**	**
内面的 (内面に内在)	交流	家族・地域との交流	家族・友人・地域との交流 ⑥	**	**	**
	探索	探索行動 発明・考案	いろいろと自分のアイデアで 試行錯誤・応用能力 ⑦	**	**	**
	創造 (イメージ形成)	創意工夫 イメージ形成	自分らしい考えを生かし、 イメージを膨らませて、 生活を創る能力 ⑧	**	**	**
	ゆとり いやし 感覚 (人間らしい要素)	人間らしい 五感	ゆとり いやし	ゆったりと生活を見直す 心と体をいやす ⑨	**	**
うれしい・悲しい 楽しい・苦しい おいしい・まずい 等 人間本来持つ感覚 ↓ 「気持ちいい」など 『快』の追求 ⑩			**	**	**	

\* 5%の有意差あり      \*\* 1%の有意差あり

類して述べる。

1) 「客観的項目」に見られる特徴

① 科学的知識

食・住・衣生活の全ての【科学的知識】に関する質問内容で、有意に高い相関が見られたが、特に住生活に関する項目で「実践能力」と「必要意識」の間に高い正の相関が見られた。具体的には、質問項目「採光や通気について、基本的な知識を生活に生かす」内容では、「実践能力」で「全くしない」と回答した生徒の77%が「必要意識」においても「全く必要ない」と否定的回答が55%見られ、次いで「あまり必要ない」という消極的回答が多く見られた。一方、「実践能力」で「よくする」と積極的な姿勢を示す生徒の91%は、「必要意識」においても「とても必要」と回答している。つまり、実体験と必要意識は密接に関係していると捉えることができる。

② 合理的知識

食・住・衣生活の全ての【合理的知識】に関する質問内容で、1%の有意差が認められたが、特に住生活に関する項目で「実践能力」と「必要意識」の間に高い正の相関が見られた。具体的には、質問項目「節電や住居内の安全など、合理的な視点で家の中を管理する」では、「実践能力」で「全く

表5. 男女別の「実践能力」と「必要意識」の相関

	軸	視点	⑩の分類項目	「実践レベル」と「必要意識レベル」の相関関係		
				食	住	衣
客観的 (外面に表出)	知識	科学的	科学的視点 ①	男 ** 女 **	男 ** 女 **	男 ** 女 **
		合理的	合理的視点 ②	男 ** 女 **	男 ** 女 **	男 ** 女 **
		情報獲得	情報獲得能力 ③	男 ** 女 **	男 ** 女 **	男 ** 女 **
	技能 (生産産業)	技能を用いた実践力	技能レベル<1> ④	男 ** 女 **	男 ** 女 **	男 ** 女 **
			技能レベル<2> ⑤	男 ** 女 **	男 ** 女 **	男 ** 女 **
内面的 (内面に内在)	交流	家族・地域との交流	家族・友人・地域との交流 ⑥	男 ** 女 **	男 ** 女 **	男 ** 女 **
	探索	探索行動 発明・考案	いろいろと自分のアイデアで 試行錯誤・応用能力 ⑦	男 ** 女 **	男 ** 女 **	男 ** 女 **
	創造 (イメージ形成)	創意工夫 イメージ形成	自分らしい考えを生かし、 イメージを膨らませて、 生活を創る能力 ⑧	男 ** 女 **	男 ** 女 **	男 ** 女 **
	ゆとり いやし 感覚 (人間らしい要素)	ゆとり いやし	ゆったりと生活を見直す 心と体をいやす ⑨	男 ** 女 **	男 ** 女 **	男 ** 女 **
人間らしい 五感		うれしい・悲しい 楽しい・苦しい おいしい・まずい 等 人間本来持つ感覚 ↓ 「気持ちいい」など 『快』の追求 ⑩	男 ** 女 **	男 ** 女 **	男 ** 女 **	

\* 5%の有意差あり \*\* 1%の有意差あり



しない」と回答した生徒の65%が消極的回答をし、「全く必要ない」の回答は約40%と高い。一方、「実践能力」で「よくする」と回答した生徒の90%が「必要意識」で「とても必要」と回答している。

### ③ 情報獲得能力

【情報獲得能力】においても全ての領域において相関が見られ、食生活の場合、健康に関心が高く食材の知識や調理法の情報に積極的な生徒ほど、こうした情報が今後も必要と考える。住生活では、インテリアに関する情報に関心が高いほど、これからの生活に情報収集は必要と考える傾向が見られる。衣生活でも同様にファッションの情報収集に関心が高い生徒は、将来的にも必要な行動と捉えるが、ファッションに関心が高い生徒は将来的にも必要性を感じないという傾向が見られる。

### ④ 技能レベル1

【技能レベル1】の基礎的技能においても全ての領域において高い相関が見られる。食生活に関しては、「野菜を切ってサラダを作ったり、目玉焼き程度の調理をする」は「実践能力」「必要意識」共に積極的に取り組む姿勢が見られるが、実践する生徒ほど今後の生活に必要と捉えている。住生活の「身の回りの整理整頓」や衣生活の「ボタン付けなど基本的な衣服の手入れ」などの基礎的技術の実践も同様に積極的に取り組む生徒ほど将来の生活に必要と捉える傾向が見られる。

### ⑤ 技能レベル2

【技能レベル2】の応用技術の全ての領域において高い相関が見られ、食生活では「ハンバーグやムニエル程度の技術」を習得する割合は低く、消極的な生徒ほど将来的にこの程度の技術は必要ないと捉える傾向がある。住生活に関しては「場所に合った掃除の仕方を実践する」などの応用的な技術は実生活における実践が低く、体験が少ない生徒ほど必要意識が低い傾向が見られる。衣生活でも、「ミシンを用いて簡単な衣服の製作ができる」ことに関し、生活の中での実践は男女共に低く、実体験の「全くない」「あまりない」と回答の生徒は、将来的にもこうした技術は生活の中で必要ではないと考えていることが分かる。

## 2) 「内面的項目」に見られる特徴

### ① 家族・友人との交流

「内面的項目」は、「実践能力」と「必要意識」の差が著しく見られない点の特徴である。全ての領域において1%の有意差で「実践能力」と「必要意識」の間に高い相関が見られる。

食生活では「家族や友人と食事を通して交流」に関し、個食が問題となる今日の社会であるが、本調査では家族で食事する生活実態が見られ、こうした食体験をする生徒ほど、将来的にもこうした要素は「とても必要」と捉えている。一方で、食を通しての交流が少ない生徒も生活していくためには必要な要素と捉えている。住生活では「楽しく団欒・交流できるインテリア」の生活における実践に関し、実践体験の少ない生徒ほど、これからの生活にも必要ないと捉える傾向がある。衣生活では「社会の中での衣服の働きを考え選択する」内容に関し、実践している生徒ほど、これからの生活で必要な内容と考える傾向が見られる。

### ② 探索行動

【探索行動】関しても、全ての領域に「実践能力」と「必要意識」の間に高い相関が見られたが、両者のレベルには食生活と住生活に関し、差が見られるのが特徴である。これは、質問内容の影響も考えられる。食生活では、「地域でとれる食材を利用した調理を考えたり、自分のアイデアでアレンジした料理を作る」とする内容で、生活の中での実践度は低いが、「全くしない」とする生徒は、これからの生活にも「全く必要と思わない」と考え、実践者は少ないが、「よくする」生徒は、これからの生活にも必要な項目と考えている。

住生活では、「住居内の問題点を見つけ、自分なりに改善方法を考え実践する」内容で、実生活での実践は低いが、これからの生活には必要と考えている。特に積極的に改善に取り組んだ経験のある

生徒は、これからの生活にもこうした視点は必要と考えている。

衣生活は上記の傾向と異なり、既に述べたように「自分らしく衣服を組み合わせたたり、着方を工夫する」内容は、女子では特に高い実践となり、「よくする」生徒ほど、これからの生活に必要な内容と考えている。男子では、衣服の選択に消極的な取り組みの生徒は、これからの生活で「あまり必要ではない」など消極的姿勢を示している。

### ③ 創造

【創意工夫】は、全ての領域で「実践能力」と「必要意識」に高い相関が見られるが、食生活と衣生活に関する【創意工夫】の「実践能力」は低い。これは質問内容との関連も考えられるが、食生活の「健康で楽しく食事するために、食生活全般を工夫する」は、既に述べたように、中学生で食事作りに積極的に主体的に取り組む割合が低いため、実感が乏しく、実践体験の無い生徒は、これからの生活でも必要ないと考える傾向が見られる。衣生活に関しては、「家庭生活が楽しくなるような」物作りの計画を問う内容であったため、生活において物作りの実践を「よくする」生徒が少なく「実践能力」の平均値に影響を与えたと考えられる。実体験の無い生徒は、これからの生活には必要ないと捉える傾向が見られ、実体験の有無が、将来の生活像にも多大な影響を及ぼすことが明らかとなった。

### ④ ゆとり・いやし

【ゆとり・いやし】に関する項目は、食・住・衣生活共に「必要意識」が男女共に高く、さらに「実践能力」と「必要意識」の間に1%の有意差で高い相関が見られることが特徴である。食生活に関しては「くつろいで楽しく食事できる雰囲気」に関しては、「よくする」と回答した87%が「必要意識」で「とても必要」「少し必要」と、これからの生活に重要な要素と捉えている。こうした傾向は、家庭における実体験が減少するほど急速に「必要意識」も減少し、明確な相関関係が見られる。住生活の質問内容「家に帰ると自分の住居に安らぎやいやしを感じる」では、実体験よりも、これからの生活でこうあるべきと求める傾向が見られ、実体験よりも「必要意識」が高い。生活の中で住まいに安らぎを感じる生徒が、こうした要素がこれからの生活に必要なと考える割合は高い。衣生活の「家に帰るとくつろぐ衣服に着替える」は、男女共に実践している生徒は、これからの生活の中で必要な要素であると捉える傾向が高い。

### ⑤ 人間らしい五感

【人間らしい五感】に関する項目も、食・住・衣生活共に「実践能力」に関わらず、「必要意識」が高いのが特徴である。実生活の現状に関わり無く、これからの生活には必要と捉える意識が見られる。しかし、「実践能力」と「必要意識」の間には1%で有意差が見られ、高い相関を示している。特に、住生活では「実践能力」が「必要意識」に比べ低いが、質問内容である「家族の気持ちを考え、気持ちよく過ごせるよう心がける」では、「実践能力」で「よくする」と回答した生徒の91%が「必要意識」で「とても必要」と回答している。衣生活における「衣服の着心地」にこだわる生徒も、こうした配慮がこれからの生活に必要なと考え、食生活で「おいしい・まずい等の味覚にこだわる」生徒は、高い相関でこれからの食生活に、こうした人間らしい五感は大切であると感じている。一方で、実生活において味覚にこだわらない生徒は、これからの生活で「必要ない」と捉える傾向にあり、生活体験が生徒の将来の生活像に多大な影響を及ぼしていることが推測できる。ただし、「必要意識」が無い場合、日常生活で実践しない可能性もあり、両者の関係は今後も検討する必要がある。

## 4. おわりに

本報は、学校教育における家庭科の学びの可能性をめぐり、「あそび」の観点から「家庭科」において従来の知識・技術の伝達とは異なる、生活創造さらに人間形成としての一面を担うことができなさを模索した一連の研究の一部である。『創造と自己解放の家庭科教育』の研究の枠組みの中では、

第7報に該当する調査研究である。

本報で明らかにしようと試みたのは、まず従来の学習指導要領の題材のねらいを「あそび」の観点で捉えなおし、現在学ぶ題材の中でも生活創造や人間形成に関わる内容がどの程度含まれているのかを検証することであった。

従来の学びの中から、「あそび」の観点で捉えた生活創造や人間形成に関わる内容を「内面的項目」として抽出し、知識・技術の伝達を主とする内容を「客観的項目」として位置付け、両者を対比して調査軸を作成した。

調査方法としては、この調査の観点をもとに、既習の学習内容を「客観的項目」と「内面的項目」に分類し、その内容を象徴する質問項目を設定した。具体的には、①日常生活の定着を探る「実践能力」と、②実践は伴わないが意識面では将来的には必要と考える「必要意識」に分類し、アンケート調査により、最も自分の現状や意識に近いレベルを選択する形式とした。選択項目は、消極的から積極的にレベル化し、選択番号を点数化し、数量で比較・検討を試みた。

予測では、「あそび」の観点で捉えた「内面的項目」は、どの生徒も今まで家庭科で学ぶ学習項目としては設定されていないため、「実践能力」としての認識は低いと考えられる。しかし、男女共に「これからの生活には必要な内容」と捉え、自分の生活を主体的に見つめる中で、長期的に位置付けて高く評価するのではないかと考える。中学生の段階では、自分の生活を主体的に創造することは現実的には難しいと考えられるが、「ゆとり・いやし」「人間らしい五感」などを家庭生活の中で求め、家庭科においても再認識する必要性を感じているのではないかと予測する。

調査結果としては、以下の4点を明らかにした。

- 1) 現行の指導内容においても、題材設定のねらいとして明記されていないが、「あそび」の観点に関わる内容が多く含まれていた。今回の調査内容は、こうした既習内容の題材をもとに質問内容を設定した。
- 2) 「客観的項目」及び「内面的項目」共に、「実践能力」よりも「必要意識」が高く評価される傾向が見られた。これは生徒が現状の実態は伴わないが、自分の理想とする生活像は積極的に描いていることを示している。
- 3) 「実践能力」と「必要意識」の間には、30項目の質問内容の全てに1%の有意差（独立性の検定）で高い相関関係が認められた。これは、生活の実践を伴う生徒ほど将来の生活にその内容が必要であると認識していることを示している。家庭生活での実体験が、将来の生活を描く生活創造に影響を与えることが考えられる。
- 4) 「内面的項目」に該当する質問内容は、男女に関わらず、「必要意識」が食生活・住生活・衣生活の全ての項目に関し高く評価されている。

上記の調査結果により、中学校段階では、「実践能力」よりも「必要意識」の方が高く、自分の理想と考える生活像を積極的に求める傾向が見られた。特に、こうした傾向は「内面的項目」に高く、食生活・住生活・衣生活のすべてにおいて、「ゆとり・いやし」「人間らしい五感」など、ゆとりと人間らしさを求めた生活を理想としていることが伺われる。この傾向は、予測した傾向と合致する。

以上が、本報告の概要である。

今後は、今回調査対象とした中学生のみでなく、小学生や大学生の実態も把握し、総合的に検討を試みたい。

アンケート調査にご協力いただきました中学校の皆様书面にて深謝致します。

## 注釈

- 1) 大学家庭科教育研究会『市民が育つ家庭科』、ドメス出版、2004.
- 2) 赤塚朋子「生活を総合的にとらえる視点と家庭科教育」、『生活経営額研究』、38巻、2003.

- 3) 日本家庭科教育学会『家庭科の21世紀プラン』, 家政教育者, 1997.
- 4) 赤井チサト, 吉原崇恵, 『これからの家庭科教育』, 建巾社, 1985.
- 5) 日本家庭科教育学会『児童・生徒の発達と家庭科教育(2) 現代のこどもたちは家庭生活で何ができるか』, 家政教育社, 1985.
- 6) 中学校指導要領(平成10年12月告示), 文部省.

資料1. 中学生の調査票

現在の生活の中で「[ ]」または「[ ]」レベル	これから生活していくために、どのくらい必要なことだと思いますか?			
	とても必要だと思う	少し必要だと思う	あまり必要だと思わない	全く必要だと思わない
よくする (よくできる)	1	2	3	4
少 す す る (少 し で き る)	1	2	3	4
あ ま り し な い (あ ま り で き な い)	1	2	3	4
全 く し な い (全 く で き な い)	1	2	3	4
下の項目は食生活に関する10つの場面です。 ●現在生活の中で「[ ]」または「[ ]」レベル ●これから生活していくためにどのくらい必要なことだと思おうか。 それそれぞれあてはまるところに○をつけてください。				
①健康のために、炭水化物・たんぱく質などの栄養素の働きを考えて食事をする。	1	2	3	4
②食事の廃棄(ごみ)を少なくする工夫や、短時間で調理する工夫をする。	1	2	3	4
③健康によい食材の知識や、新しい調理方法・メニューについて進んで情報を入手する。	1	2	3	4
④野菜を切ってサラダ作りを作ったり、玉ねぎを作る程度の技能の食事作りをする。	1	2	3	4
⑤ハンバーグや魚のムニエルを作る程度の技能の食事作りをする。	1	2	3	4
⑥家族や友人と楽しく会食をするなど、食事を通して人との交流をする。	1	2	3	4
⑦地域でとれる食材を利用した調理を考えたり、自分のアイデアでアレンジした料理を作る。	1	2	3	4
⑧家族が健康で楽しく食事するために、食事のメニューや食生活全般について工夫する。	1	2	3	4
⑨家族で(一人で)ゆっくりと、くつろいで楽しく食事できる雰囲気が大切だと考え、心がける。	1	2	3	4
⑩食生活は「おいしい」「まずい」など味覚にこだわったり、人間らしい五感で感じるこ とが大切だと心がける。	1	2	3	4
下の項目は住生活に関する10つの場面です。 ●現在生活の中で「[ ]」または「[ ]」レベル ●これから生活していくためにどのくらい必要なことだと思おうか。 それそれぞれあてはまるところに○をつけてください。				
①部屋の採光(光の入り方)や空気の通気(風通し)などについての基本的な知識を生活に生かす。	1	2	3	4
②節電や住居内の安全など、合理的な視点で家の中の管理をする。	1	2	3	4
③家族が快適に楽しく生活できるよう、住まいの情報を活用したり、インテリアの雑誌などから進んで情報を収集する。	1	2	3	4
④自分の身の回りの簡単な整理・整となどを を す る。	1	2	3	4
⑤ガスレンジ、ふろ・トイレなど、各場所に合った掃除の仕方を知り実践するなど、身の回りの清掃をする。	1	2	3	4
⑥家族や友人と、楽しく団らん・交流できるように、住まいのインテリアを工夫する。	1	2	3	4
⑦住居内の問題点を見つけ、自分なりに改善方法を考え実践する。	1	2	3	4
⑧自分の部屋、または住居の一部で、自分のアイデアを生かした自分らしい・自分が快適だと感じる部屋作りをする。	1	2	3	4
⑨家に帰るとホッとするなど、自分の住居に「安らぎ」や「いやし」を感じるように工夫する。	1	2	3	4
⑩洗面所やトイレなど、家族みんなを使う場所を、他人の気持ちも考えながら、住居内で気持ちよく快適に過ごせるよう心がける。	1	2	3	4